

編者はしがき

本書第十巻には、宗教上、最も重要なテーマである「罪」について語られている。キリスト教の「原罪」「罪の子」、仏教の「罪悪深重の凡夫」等の言葉に代表される「罪」の意識は、これまで人類の意識に深く根を下ろし、人間を縛り、神と人間との間を裂き、お互いを遠くに引き離してきた。その結果、人間は幸福ならんと欲して不幸を招き、健康を望んで病気を引き起こし、神の救いを求めるとして罰の報いを受けてきた。

谷口雅春先生の教えは、一言で言つて、この「罪」からの解放である。そして、人間に根深く植えつけられてきた「罪の意識」にもかかわらず、その意識のさらにその下に何であろうか。

では、「罪」とはそもそも何であろうか。本書では次のように説かれている。

「人間という者を本当に『神の子』だと自覚しないで、『誰でも人間はこれ位のことはする者だ』といつようなく、白らを卑しめる觀念を有つてゐるから悪を平氣で行うようになるのです。自ら卑しめる觀念は罪の本です」(三三頁)

「罪」とはいつも申します通り「包み」であり「積み」であります。「実相」の上に積み、重なつて実相を包み隠している念波の聚積が「罪」なのであります。本来それは

「神の子たる吾々の実相ではないから存在しない、「無」であります。が、仮相の世界に於ては仮存在として一種の運動慣性を有つてゐるものであります。これを仏教などでは業の流転力といつています」(四〇頁)

「罪の価は死なり」とか、「罪の報いは苦しみである」とか申しますが、一層適切にいえば、「死」とか、「苦」しみとかは、罪の償いとか、罪の報いとかいうような間接的なものではなく、「罪」そのものが「生命の死」であり、「罪」そのものが「常樂の死」であります。何故なら、「生命」の本然の相を包み隠しているのが罪であり、神の子たる「実相の常樂」を包み隠しているのが罪でありますから。だから吾々は罪そのままで勘弁してもらつても、決して「実相の常樂」を味うことは出来ないのであります。だから吾々の罪が赦されて天国的境地に引上げられるためには、是非とも「罪」そのものの破壊がなければならぬのです。それ故に吾々が宗教上の意味で「罪が赦される」といふのは、罪そのものが破壊される。——罪そのものが本来の「無」に帰して、神の子本来の実相の常樂があらわれるということでなければならぬのです」(二九〇三〇頁)

そして、次に、その「罪」をいかにして消し去るか。

「罪」は「罪」を捉えて一つずつ支払ついても無くなるものではありません。それは例えば、あなたが暗黒の中にいて、暗黒を捨てようと思つて暗黒を握つてなげ棄てなげ棄としても、暗黒は無くならないとの同じであります。暗黒は即ち「光が無いこと」

——本来「無」でありますから、暗黒を握つて捨て去るわけには行かない。罪も本来「無」でありますから、「罪」を捉えて一つずつ支払つても消えるものではない。暗黒を消すにはただ光を点すれば好い。罪を消すにはただ「生命の実相」に帰入するだけで好いのであります」(二七頁)

「如何にせば、吾々の過去世以来の「悪念の運動慣性」(罪)を消すことが出来るかといいますと、「罪を發見してこれを捨てる」にあると申しました。しかし、「々これを發見して捨てるということになりますと、吾々は過去世以来の無数の悪念の運動慣性を有つてゐるのでありますから、それを發見するだけでもなかなか大変であります。その上それを一々捨離して行くということに到つては益々大変であります。しかし、ここに好

い方法がある。それは「悪といふものが本来無い」世界に帰入してしまうことあります。それは、「人間は本来神の子であるぞ」という神示をただ絶対的に信じ受けて、「ハイハイ、わたしは神の子でございます。有難うございます」とその真理をそのまま受ける神想観であります」(四六一四七頁)

谷口雅春先生によつて、この「罪の無」の真理がこの地上世界にもたらされたことによつて、無数の人々の上に無上の福音が訪れたことは、第八卷 第九卷 本巻を通した「聖靈篇」全體に充ち満ちている。まさに谷口雅春先生の「統々甘露の法雨」の一節、天使斯く啓示したまゝとき／すべて人類の病患は忽ち消え／盲人は眼ひらき、跛者は起ち上り、／歎喜し相擁して／天日を仰ぎて舞踏するを見る』ような世界が、我々の眼前に現出したのである。

この宗教史上、画期的な大真理である「人間無罪」の大宣言を、真に吾等のものとするよう、谷口雅春先生が繰り返しその実践を促されたものが「神想観」である。

「正しい祈りとは實にこの『私は神の子です』との息宣であります。…この息宣が神想観であります。『神の生命われに流れ入りて吾が生命となる』『われは神に満たされ生かされて神と不可分の一体である』この感じを理屈でなしに、現在意識だけではなしに潜在意識の底の底までもたたみ込むのが神想観であります。だから、多くの祈りかたはありますけれども、神想観にまさる祈りはないであります」(二二頁)

ここに、吾等は、地上のすべての人間の救いを成就せんとする谷口雅春先生の愛の深さを思わずにはいられない。この「人間無罪」の真理を深く体得し、真剣に「神想観」を実修していくば、必ずや吾等の人生に「罪なき天国淨土」が招來されるのである。